



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2009年3月発行(3ヵ月1回発行)

第41号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

- 日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援
- 貧しい国々での医療活動を支援
- 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催



村松乙彦 「桜花ルリ鳥」

——1981年、(社)海外と文化を交流する会がニュージーランドに寄贈した日本画26点の中の作品。村松は1912年9月26日、愛知県生まれ。浜松一中から法政大学仏文科予科に進み、夜間、太平洋絵画研究所で油絵を学ぶ。法政大学を中退し、日本美術学校日本画科に入学・卒業。児玉希望に師事し、1941年「珊瑚礁の海」が第4回文展で初入選。49年の「浮島の朝」、51年の「快晴」が日展で特選。美を求める旅人を自称して、61年にヨーロッパ等を歴訪。日展審査員、評議員、大森貝塚保存会副会長など歴任。83年逝去、享年71歳。

随筆・寄稿

■「人との出会いのすばらしさ！」

ジョージ・W・ギッシュ(社)海外と文化を交流する会会長

私は現在、江戸川総合人生大学国際コミュニティ学科学科長でもありますので、その活動について次の様に報告をさせていただきます。「海外と文化を交流する会」のためにも参考になれば良いと願っています。

江戸川区が5年前に立ち上げられた「江戸川総合人生大学」は、社会貢献を目指す人々を応援する地域の「新しいカタチ」の「共育」の場を実現しようとしています。四つの選択の中で、私が担当しているコースは、「国際コミュニティ学科」です。

区民である学生たちが自発的に様々な分野で各地域に具体的な活動を広げています。特に、区内外国人の人口が年毎に増えている現象を考えますと、（実は東京都23区内では、江戸川区の外国人の人口は2番目に多い）この学生達の地域との取り組みは日本人は勿論、多文化の人々とのつながりに大きく貢献しています。

このような区民活動を可能にしたのは、区の行政の全面的なサポートがあったからこそ、ここまで出来たのです。昨年から篠崎の文化プラザの中に新しい施設が与えられて、益々その活動が活発になることを期待しています。

2008年の秋に新たに江戸川総合人生大学に5期生の新入生100人ほどが加えられて、国際コミュニティ学科の30人の学生も新しいスタートが出来ました。各年期生には卒業する前に、二年間の学習体験を評価してもらいます。毎年「一番良かった」と評価される課題は「素晴らしい仲間と出会った」になるのです。

今年度も殆ど他人同士であった5期生にも、これからどのような出会いが待っているのか楽しみにしています。一年目の授業は毎年10月から始まります。5期生の最初の授業で、それぞれ自分の国際的体験を学生同士が自己紹介するなかで、お互いの関心度が高まってきました。長年の海外勤務や若いときの留学、度々の海外旅行や自分の子どもたちの国際結婚等々の体験談を聞きながら、同じ江戸川区に生活している方々の中にこんなに豊かな国際経験者が多いということをお互いに発見することこそ「国際的町づくり」の基礎になっていきます。

今までの一期生から4期生までの学生も、自分たちの豊かな人生経験を踏まえながら、少しずつその輪を江戸川区の各地域に広げてきました。自分たちのフィールドワークを通して区内に住む他の国から来ている2万4千人程の方々の生活状況を把握しつつ、その人達との交流が深まってきました。その中で又、素晴らしい出会いが繰り返されます。自分達の人生も相手の人生もより豊かになっていきます。

私の人生も、この江戸川総合人生大学で与えられた素晴らしい出会いを通して、より豊かになりました。私自身のフィールドワークのテーマは「日本の音楽とその文化史」です。そ

の中で出会った「迷悟もどき」という薩摩琵琶歌の言葉にはこの「人生大学」の精神がうたわれているような気がします。

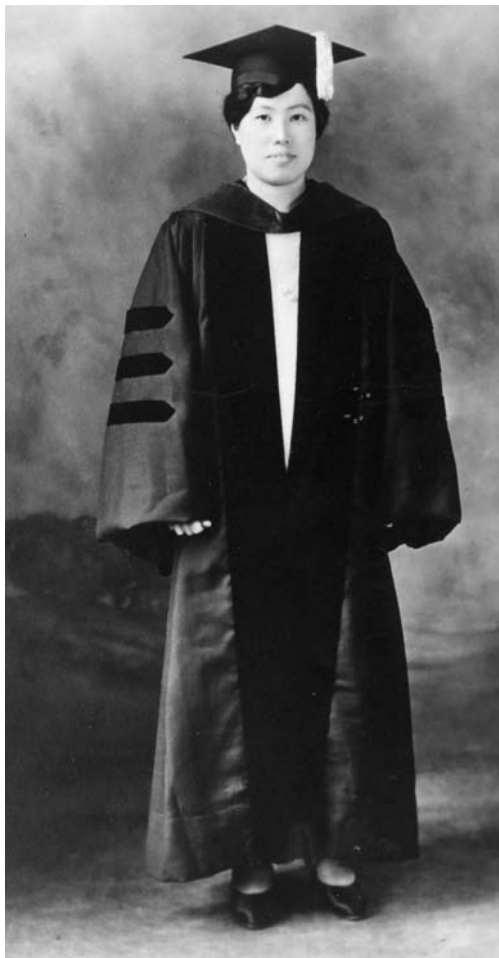
♪ 何れ人には情あれ。情は人の為ならず、廻り廻りて小車の後は我身の為となる♪

要するに、「町づくり」という「情け」は「自己づくり」でもあり。「ひと」との「出会い」のなかで「人を愛する」江戸川区の町づくりが成り立っていくのです。

そこで、私達の「海外と文化を交流する会」においても前文のような江戸川区の「国際コミュニティづくり」と同じ精神で進んでいきたいものです。

■当会の創設者 松岡朝女史の著書「アメリカの感情」の紹介

大谷俊介(社)海外と文化を交流する会常務理事



1932年6月 コロンビア大学より
法学博士号を授与された松岡朝女史

最近数年間の習慣として、理事の有志が2ヶ月に1度集まって企画委員会と称し当会の活動計画などを話し合っている。その中ではチャリティ・コンサートの企画や留学生支援のことが話題になる。今年2月に開かれたこの会合で、当会の創設者である松岡朝女史の足跡をもう一度振り返って見ることは意味があるのではないかとの話が出た。そこで、まず初めに昭和14年出版の朝女史の著書「アメリカの感情」を読んでそれを会員諸姉兄に紹介したら良いとの提案が委員達から出て、ご息女の松岡裕子、当会専務理事から、その本のコピーが私に回ってきた。

この読后感想文は佐藤純一理事が後日書いて下さることになっているので、今回の私の役目は、松岡朝女史とこの本が出版された時代背景などを紹介することにある。そして、この本の冒頭にある女史の序文と松田竹千代氏による寄稿文を、いずれも旧仮名遣いではあるが、できるだけ原本に忠実に複写して後記に抜粋してお見せすることにした。

松岡朝女史は明治26年(1893)に横浜で生まれた(ご逝去は1980年)。生後すぐに日清戦争(1894-)がはじまり、そのあと日露戦争(1904-)、第1次世界大戦(1914-)と続

き、いっとき大正末期の比較的平穏な時期はあったものの、昭和になるとたちまち張作霖爆殺事件(1928)から日中戦争(1937-)に向かい、第2次世界大戦(1939-)の中、日米開戦となりやがて敗戦を迎えることになる。朝女史は、まさしく激動の時代、多くの戦争の中を生き抜いた。そのため人一倍平和を大切に思い、世界の人たちとの友好交流を切に望んだのであろう。真の平和主義者であった。

彼女は津田塾を出たあとしばらくしてNYのコロンビア大学に直結した女子大、バーナードCollegeに留学し(1922)、苦勞しながら勉學に励み、多くの友人を得て1932年に名門コロンビア大学で労働法のPh.Dを取得した。これは日本女性としてはじめての偉業であった。そして、在米期間中にはウォール街株式が大暴落、いわゆる大恐慌(1929)に遭遇しながらも、ニューヨーク・メトロポリタン美術館などに勤め、日本美術の普及に力を注ぎ、米国各界の人たちとの交流を深めた。戦後は日本の国際交流、平和外交のオピニオン・リーダーの一人として活躍し、ユニセフ協会日本支部の設立(1950)などに貢献した。そして、1968年に社団法人「海外と文化を交流する会」を創設した。

「アメリカの感情」と題されたこの本は今では絶版となり入手困難であるが、日米開戦前夜の緊迫した中で日米民間外交の献身的努力の跡を記録した貴重な報告書である。松岡朝女史は、軍国主義日本が奈落の底に落ちはじめた時代、すなわち、日本国軍部が上記の張作霖爆殺のあと満州事変、上海事変を起こし、国際的批判が強まる中で国連を脱退し(1933)、盧溝橋事件(1937)に端を發し日中戦争に突入した時期に、アメリカ帰りで国民感情を良く知っている人物として1938年に排日感情渦巻くアメリカに日本国の政府筋から単身派遣され、怒り狂う対日与論を和らげるため大変な努力をしたのであった。

約1年の滞在期間中にアメリカ国内をくまなく歩き、各地の婦人会や有識者懇談会に向き、平和を愛する日本と伝統美、国民性、その感情の優美さなどを訴える講演を行い、パーティを主催したりした。その数はざっと100回を超える。まだ40歳代半ばの女盛りだったとは言えるものの、この行動力はまさに超人的である。旅の途中では首都ワシントンのホワイトハウスでルーズベルト大統領夫人にも面会、親しく懇談したり、各地で多くの有力婦人に会い、無いに等しかった日本への理解を深めるため精力的に動き回ったのだ。おかげで、草の根レベルでは日本への嫌悪感が薄らぎ、敬意と親近感を持つ人たちが増え、彼女の努力がニュースにもとり上げられたりもした。大きな功績があったと言うべきであらう。

しかし、このつらい苛酷な旅から帰国してすぐに、努力虚しく日米通商条約が破棄され、日米開戦となるのであった。献身的で崇高な活動が、軍部主導の悪政のため無惨にも悲しい結果に終る現実となった。痛ましくもあり、情けない限りである。ただし、松岡朝女史を見て知った多くのアメリカ人の中に日本への好感情が根付いて残ったことは確かであり、それは我々にとって何にも代えがたい財産となっているに違いない、と想う。松岡朝女史は、まさしく、我々の会の活動理念である「心の交流」を70年前に身をもって実践したのであった。

~~~~~

#### “アメリカの感情” 對日與論と闘ふの記 松岡朝子著

昭和14年(1939)11月、誠文堂新光社 出版

## はしがき

私は日本で普通教育を受け、米國へ行って大學教育を受けまして、あちらで長い間實務に就いてをりましたが、久しく外國にをりますと、どなたでも、しみじみとわが祖國の有り難さがわかるやうに、私も長い間米國の如き唯もう物質文明の勢力をほしいままにしている處にをりまする間に、遠くからわが祖國の姿を眺め、日本文化を再認識する機會を興へられまして、我國の文化、殊に日本精神文化の著しく卓越してゐる事などが、十分に理解されて、何とも言へない祖國愛に燃えるのでした。

私はまた、さうした氣持で、わが在米同胞が、如何なる山間僻地にも、活動の天地を見出して、はるかに祖國を想ひつつ、力強い生活を續けてゐることの尊さが、よくわかるのであります。

この書物は誠に拙ない、小さなものでありますが、私が重い指命を帯びまして、最近一ヶ年間米國の東から西、北から南へと、忙しい講演行脚をつづけました時の私の感想やら、名士との對話やら、この事變下における在米同胞の涙ぐましい活動やら、その他あちらの人々がどういう風に、わが日本を見、日本人を理解してゐるか、そのまま書きつらねましたものでありまして、私は只今これを公にするに當りまして、何等の大きな目的を持つものではありません。唯この書物が、今後いかにして日米國交を調整すべきかといふ當面の重大なる問題について、朝野要路の人々に、とくと考へて戴くための御参考になれば、望外の幸と思ひます。

猶この書物を出しますに就いては、在米同胞を始め、米國各地の外交國各位、その他私の旅行中多大の御援助を賜はりました人々、特に桑港の高橋・渡邊兩先輩の御指導と御後援に對して謹んで謝意を表します。

昭和 14 年 11 月

著 者

~~~~~

「アメリカの感情」に寄す

去年約一年間アメリカを飛び廻って、各地の大學や俱樂部で、日本のスポークスマンとして、これ務められた松岡女史には、初めて華府で一緒になったが、兎に角大した活動振りであつたらしい。

日本では、如何に堂々たる名士でも、亦大袈裟な所謂遣外使節などと云ふものでも、一度米國內へ一歩でも這入ったら最後、忽ち、小さくなって仕舞って、正に貧弱そのものだ、どうして、あの猛烈な排日の旋風裡で、手も足も出るものではあるまい。

「ガッツ」がなければ駄目なんだ。ヤンキ張りの「ガッツ」と云ふやつだね、敢へて心臓と云ふ譯ではない。氣もつ玉でもない、アメリカ流なシヨツ骨とでも云ふか確に松岡氏はその「ガッツ」の持主だ。勿論女史は英語も好いだらう、何んにせよ、コロンビヤの Ph. D と云へば、生やさしい勉強では貰へぬ譯だし、それにお喋りを天職とでも心得て居るかの如き、ヤンキー娘達のさ中で、十数年間も錬え上げたと云ふから。今日もう所謂演説：オーレーションなど時代遅れとなつた米國で平易に、素直に、而して無遠慮に米國人に物申

すとなったら、アサコ マツヲカ女史など、蓋しその第一人者と云ふのであらう。

青少年時代のアメリカ生活を回顧して

松田 竹千代

[追記]余談として、この松田竹千代氏の人物像を簡単に紹介する。

1888年大阪河内生まれ。米国の西部開拓を夢見て14歳で単身渡米。ニューヨーク大学を卒業(1911)後帰国し、戦前の立憲民政党の衆議院議員(1928)となる。

三木武夫氏らと行動を共にする。戦後、公職追放されたあと復活し、鳩山一郎、岸信介内閣(1950年代)で郵政、文部大臣などを歴任、衆議院議長(1969-)を最後に政界を引退。ユニークな行動派として知られた(享年92歳)。

ニックネームは「テキサス無宿」。

■Friday-night express

松岡恒太郎(社)海外と文化を交流する会常務理事

金曜夜、品川を出る新幹線は、新横浜で発車するお客を乗せて
ほぼ満席で滑りだす。週末を自宅で迎えるサラリーマンの帰宅専用
列車の様相となす

だいたいビールにおつまみをかかえ、
座ってほっと一息ついた後、あっちで「ブッシュ」、こっちで
「ブファー」の音が聞こえる

品川駅ホームで、厳しい顔をしたサラリーマンも、
前方のナナメの席から、ちらっと見える携帯の待ち受け画面が、
親子の写真だったりするので、なぜかほっとしたりもする

昨日、今日、息子は昼夜見境なく泣き、何かを訴えるように声を枯らし
皆を困らせているらしい

抱いている腕で泣かれるとうんざりすることもあるが、小さいときはあつという間だから、
いまこうして新幹線に乗り、帰路につきながらも、早く会って、この腕で抱き上げたい心
境になる

窓の外は、もうすっかり暗く、紺青や辰砂がかったオレンジの電飾が複線をなす

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ミルクをのませているときに

じっとわたしを見ている息子
真っ黒い真珠のような瞳を輝かせ
一点の曇りもない目でわたしを見る君

君は何も語らないけれど
わたしが学ぶことは果てしなく大きく広い

■ 日本語教師として働いて

伊能祥子(社)海外と文化を交流する会会員

3歳半になる孫は、このごろ夕食の後のトランプ遊びに夢中だ。ババぬきや7ならべなどだが、トランプを母親にわたしながら、「ママ、ようくきってね。」などという。大人の使っている言葉を体験しながら覚えていく。それまでの彼の語彙では‘きる’は‘はさみできる’ていどだった。これはほんの一例だが、私は第一言語の習得過程のすごさをつくづく感心した。長年日本語教師をしていた私は、初孫誕生以来、幼児がどのように音を出し、語句や文章を言えるようになるのかに興味を持って観察していた。やはり周囲の人のやりとりや話しかけを一日中聞いている、その状況と意味を理解して鸚鵡返しにつかってみる。そして、時々やんわりとなおされて身につけていくのだと、その速さに目を見張っている。

わたしはセントメリーズインターナショナルスクール(以下SMIS)で定年まで25年間、第2外国語としての日本語を教えてきた。この学校は幼稚園から12年生までの男子校で、60カ国余りの外国人の子息900人ぐらいがアメリカの教育のカリキュラムに従って勉強している。いわゆる帰国子女の日本人も多い。また、SMISでは1954年創立以来、日本語は小学生は3年から必修科目で、中高生は選択科目になっている。しかし中高生の90%はフランス語やスペイン語ではなく、日本語をとっている。

創立当時は、外国人子弟にとって、日本語はお手伝いさんの言語だった。日本が経済大国になった1980年ごろには米国、豪州など世界各地の大学で日本語教育がさかんになり、さらに高校でも教えるところがふえてきた。そんな中でSMISでも、日本語に対する認識が変わってきて、生徒よりも親が夢中になり、「今、このチャンスに日本語を勉強させなければ。」という時期になった。

しかし、最近では世界全体に日本語を取る学生が減少傾向にあるようだ。原因の一つに日本語習得の難しさがあると思う。世界的な共通試験であるIB(国際バカロレア)は、ヨーロッパ系やオーストラリアなどの大学の入学試験に代わる大切な試験で、生徒は卒業までに6科目の合計点でIBの資格を取得しなければならない。ところが、第2外国語として日本語を選んだ外国人高校生のIBの平均点は、同じ期間で他の外国語を勉強した学生と比べると著しく低い。そのため、日本語を選択する学生数が減ってきたという。

日本語の難しさの一つは三つの字体、すなわち平仮名、カタカナ、漢字（音読み、訓読み）、があること、それに敬体（です、ます）と常体（だ、いく）、さらに敬語が加わってくると、かなりの生徒が拒否反応を示す。毎日の地道な努力の積み重ねが大事だが、環境を整えるということも大切だ。私は長年 I B クラスを教えてきたが、日本以外に住んでいる外国人学生に比べると、日本に在住する S M I S の学生は例外的にいい成績をとっていた。日本に住んでいて、テレビから流れる言葉をきいたり、広告や駅の名前の漢字をみたり、日本人の話すことを耳にする機会が多いということは、かなりアドバンテージになる。結構マンガもいい媒体である。

「もう2年も日本語を習っているのに、ちっとも話せない。」と文句を言う父兄もいるが、そういう生徒は英語の通用する Community にどっぷりつかっていて、日本語を話すのは日本語のクラスだけということになりあまり上達しない。地域の剣道教室に行かせたり、サッカーのチームにはいっていたりすると、自然な言葉がでてくる。さらに母親が日本語をならったりしていると、motivation になる。日本語の習得にはその家庭の姿勢が問われてくるような気がする。

私はおもに中学生と高校生を担当してきた。教師としての一番大切な仕事はなにかというと、クラスコントロール、つまりいいクラスを作ることである。大体アジア系の生徒は教師というと一応尊敬の目で見えてくれるが、欧米の生徒はそうではない。自分の目で見て自分で教師を評価していく。そこにいくまではこちらも真剣勝負である。毎年8月20日前後に1学期がはじまると、生徒たちのレベルを把握し、1年の Course Description を作成。それを父兄にわたし、その年このクラスでどういうことを生徒が学び、その結果どういうことができるようになる（はず）と知らせる。生徒にも1年のクラスの達成目標をしめしていくが、何よりも静かないい環境で勉強できるクラスにしていかなければならない。

もちろん名うての問題児もいるし、AD 児（注意力散漫）もいるわけだが、2、3ヶ月ほどとにかく厳しく接し、問題が起きると迅速に処理、（校長に送る、親に電話して面談する、DT と称して放課後50分居残らせてワークをさせる、成績に Behavior 点を組み込んでマイナス点をつけていく等々）、この間はめった冗談を言ったり、笑ったりしない。

これがうまくいくと、12月頃になると教師と生徒の間に何とも言えない暖かい空気がながれてくる。私のほうも生徒の特徴、性格などがわかってくるし、生徒も私のいやがることやよるこぶことがわかってきて、この教師についていこうという気になってくれる。このような信頼関係ができると、このクラスは1年の終わり、6月にはかなり成長し日本語の力がつく。この成長を見るのは教師としての無上の喜びである。ところが、これがうまくいかないと、そのクラスは春3月から4月になると動物園化する。男子校独特のものなのかもしれないし、そろそろ終わり [6月初め] が見えてきたことによる気のゆるみななのかもしれない。これが期末試験前の5月中旬まで続くのである。

教師にとっていかにいいクラスにしていけるかは毎日の目標であり、戦いであり、うまくいった日は晴れやかな気持ちで家路につくが、うまくいかなかった日は結構落ち込んで、次の日に向かって対策を立てる。問題が起きたとき、私は16、7人の生徒を相手に格闘技をして

いる気がする。あちらが私を攻めて押してくるとき、一步も引かないで押し返し、正常なクラスに戻さねばならない。もちろんうまくいかず、生徒の提案によって遊ぶ時もあるが、クラスの準備はかなり周到にやらなければならなかった。たとえば、眼鏡一つ忘れても、これはこちらの弱みになった。特に教師になりたての頃は泣きたくなることもあり、登校拒否の気分の時もあったが、それでもこの仕事は生身の人間を相手にする楽しさがあり、若い子を相手にやりあったり、話を聞いたりするのはよろこびだった。

国際化という言葉が盛んにつかわれているが、外国語を学んで外国の文化や生活を知ること、そして communication 能力を身につけていくことも大切だが、外国人に日本語習得を通して、日本文化や生活習慣、日本人の考え方を広く知ってもらうのも国際化の一端だと自負している。ある卒業生が米国スタンフォード大学で日本文学を学び、リーベ秀雄の研究で日本にきていると教員室によってくれたことがあった。日本語をとっている高校生全員にスピーチをしてもらったが（これは英語だった）高校生の時に種をまいておいたのが花を咲かせてくれたと日本語教師一同感動したものだ。

お知らせ & 報告

■寄付を戴きました

会員の渡辺いつ子さま、室井禮子さま（室井鐵衛名誉会長夫人）から、多額のご寄付を頂戴いたしました。紙上を借りまして厚く御礼申し上げます。

■会費納入のお願い

2009 年度の年会費納入をお願いいたします。さらに 2008 年度 2007 年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。オーストラリアやニュージーランドに寄贈日本画の里帰り展も実現したいと思います。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行渋谷支店（普）2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000 円（正会員） 5,000 円（特別賛助会員） 3,000 円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org
<http://www.kaigai-bunka.org>